

忘れ去られる人道危機の中で、 女性たちは……

黒崎 伸子

「国境なき医師団 (MSF)」は、紛争地帯や自然災害の発生地、感染症の流行地域、また社会や医療から疎外された人々に医療を届ける民間の国際的な医療・人道援助団体である。その特徴は、できるだけ早く現場に赴き、一切の差別なく、中立・公平に手を差し伸べ、あらゆる政治的権力から独立して医療活動を行うことである。

医療の進歩によって、先進国では寿命が延び、先進医療の恩恵を受ける人が増えた。その一方で、世界では未だに数多くの人道危機が忘れ去られ、渦中にある人々が放置されている。そして、多くの人道危機の現場では、治安の悪さや国際援助に対する現地政府の許可が得られないなどの障壁があり、人々が必要な医療や物資にアクセスできない理由となっている。

今年4月、私は内戦が続くシリアで外科医として現地の活動に参加した。MSFはシリア国内で5ヵ所の病院と移動診療を展開しているが、活動は北部の反政府勢力の支配地域に限られている。シリア政府が国際援助団体の介入を制限しているためだ。ある日搬送されてきた生後4ヵ月の女児は全身蒼白で呼吸が浅い。点滴・輸血で命はとりとめたものの、負傷した右脚は切断を余儀なくされた。空爆で、両親と一番上の兄は即死したという。家を失い、家族を失った子どもたち……この子らの将来を思うとやり切れない思いだ。しかし病院へ辿りつくのは、生き残った者だけで、それすらかなわず命を落とした人も多いただろう。この国の犠牲の大きさを思いながら、日々の診療にあたった。罪のない国民の犠牲はさらに増えるに違いない。

長く続く紛争や貧困、食糧危機などに直面する地域では、妊産婦死亡率や乳児死亡率は依然として高く、女性・少女への暴力も絶えない。近年エイズ感染者に占める女性の割合も増加している。このような世界の現状に心をとめることから援助が始まる。



PROFILE

くろさきのぶこ：特定非営利活動法人国境なき医師団日本会長（2010.4～）。黒崎病院院長、大村市民病院小児外科・女性外来。長崎大学医学部卒業。長崎大学病院第一外科、長崎医療センター等に小児外科医として勤務。2001年より国境なき医師団の医療・人道援助活動に参加。スリランカ、リベリア、ソマリア、シリアなど計11回派遣され外科医として活動に従事。日本BPW連合会元会長・ながさき女性医師の会副会長等、様々な社会活動にも参加。